

Jane Austenにおける数の一致：社会言語学的考察

末松，信子
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494438>

出版情報：比較社会文化研究. 2, pp.27-31, 1997-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：



Jane Austen における数の一致

— 社会言語学的考察 —

末 松 信 子

I

英語史的にみて、18世紀は、ほぼ今日の統語法（シンタックス）が確立していたと考えられている。そのため、今日の英語とほとんど変わりはないということで、これまで研究対象とされることが少なかったように思われる。しかし、細かく見てゆくと、変化途上にあるものや、未発達の統語現象も少なくない。幸いこの時期は、小説等が多く世に出されたこともあって、当時の言語現象を知るのに豊富な資料を提供してくれる。そのような資料の一つに、Jane Austen (1775-1817) の作品がある。彼女は18世紀末から19世紀前半にかけて活躍し、主な小説を6篇残している。小論では、この6篇すべてをとりあげて、その中にみられる主語と動詞、あるいは不定代名詞 (*everybody/every body, everyone/every one, nobody*) とそれを受ける代名詞との間の数の一致 (Concord) に関して、その特徴を歴史的コンテキストの中で明らかにし、かつ社会言語学的な考察を試みたいと思う。

Austen は18世紀の規範文法家の影響を受け、文法の誤りには特に注意を払い、地の文では文法的誤りを避けようとしたが、逆に登場人物の発話では、教養の無さを示すために、意図的に非文法的な表現形式を用いていることが指摘されている。⁽¹⁾ 主語と動詞の一致に関しては、とりわけ話者による違いが顕著であり、社会言語学的視点からの考察が可能であると思われる。また不定代名詞の代名詞呼応に関しては、18世紀の文法家によって単数呼応が正用法とされたと言われているが、⁽²⁾ 今日では単数呼応と複数呼応との間で揺れが見られる。Austen ではどのような状況であったのか、その点を明らかにしたい。

小論において使用した刊本は、R. W. Chapman (ed.), *The Oxford Illustrated Jane Austen*, Third Edition, 5 vols. (London: Oxford University Press, 1932-34) で、作品名と刊行年及び小論で用いたそれぞれの略称は以下の通りである。

Sense and Sensibility (1811) = SS*Pride and Prejudice* (1813) = PP*Mansfield Park* (1814) = MP*Emma* (1816) = E*Northanger Abbey* (1818) = NA*Persuasion* (1818) = P

II

2.1 まず、主語と動詞の一致について見てみる。18世紀後半から19世紀前半の Austen の時期には、一般動詞は、3人称単数現在の場合に *-es (-eth)* 語尾が付き、be 動詞は、主語が1人称単数ならば *am/was*, 3人称単数ならば *is/was*, 主語が2人称単数あるいは複数ならば *are/were* になるという現代の用法が確立していた。しかし、Austen の作品には、主語と動詞との間に時おり数の不一致が見受けられる。Phillipps (1970, pp.157-58) は、Austen が意識的に一致の規則を破り、話者や手紙の書き手の教育程度の低さを示しているといい、その例として次の *Sense and Sensibility* 中の Anne Steele の発話を挙げている。

(1) “and how *was they* to live upon that?” (SS, p.273)

(1)の主語 *they* は当然 *were* で受けるべきであるが、*was* が用いられている。他にも *they was* の例が、同じ *Sense and Sensibility* 中の召使いの会話の中に2例見られる。

(2) “*They was* stopping in a chaise at the door of the New London Inn, as I went there with a message from Sally at the Park to her brother, who is one of the post-boys.” (SS, p.354)

(3) “and how sorry *they was* they had not time to come on and see you, but *they was* in a great hurry to go forwards, for *they was* going further down for a little while, but however, when they come back, they’d

make sure to come and see you.” (SS, p. 354)

(1)の Anne Steele も(2)(3)の召使いも教育程度の低い人物であり、他の登場人物には *they was* の用例は見られないことから、*they was* は Austen が意識的に、教養のない人物に使用させている表現であることがわかる。

また *you were* の代わりに *you was* を用いている例も見られる。Uhrström (1907, p. 18) は、単数の場合に *you was* を用いる用法は、18世紀には教養ある人々の間でも普通であったという。しかし、Phillipps (1970, p. 159) も指摘するように、この用法は文法家たちには非難され、Austen では *Sense and Sensibility* の中で教養のない姉妹として描かれている Steele 姉妹の言葉にしか見られない。以下に示す3例は、Austen に見られる *you was* の例すべてである。

(4) “and as soon as I saw you, I felt almost as if *you was* an old acquaintance.” (SS, p. 132)

(5) “and I do really believe, that if *you was* to say to me, ‘I advise you by all means to put an end to your engagement with Edward Ferrars, it will be more for the happiness of both of you,’ I should resolve upon doing it immediately.” (SS, p. 150)

(6) “I wonder *you was* not afraid of its being torn.” (SS, p. 276)

(4)(5)は Lucy Steele の発話であり、(6)は姉の Anne Steele の発話である。手許の第3版ではこの3例しか *you was* は見られないが、Phillipps (1970, p. 159) は、初版から次の例を挙げている。

(7) “I thought *you was* against me.” (MP, p. 346)

これは *Mansfield Park* の主人公 Fanny Price の発話である。このように初版では *you was* が使われていたが、彼女が叔父の家で小さい頃から教育を受けており、*you was* といった教育程度の低い表現はふさわしくないとされたのか、第3版では次のように *you were* に訂正されている。

(8) “I thought *you were* against me.” (MP, p. 346)

このことから、Austen が *you was* という表現を、教育程度の低さを示すために意図的に用いていることがわかる。

人称代名詞以外の名詞と動詞の間にも、数の不一致が見られる。人称代名詞の場合は *Sense and Sensibility* にだけ不一致の例が見られたが、人称代名詞以外の名詞では、

Sense and Sensibility に加えて、*Northanger Abbey* にも数の不一致の例が見られる。以下にその例をすべて挙げる。

(9) “Edward *have* got some business at Oxford.” (SS, p. 275)

(10) “No, ma’am – the horses *was* just coming out, but I could not bide any longer; I was afraid of being late.” (SS, p. 355)

(11) “Here is Morland and I come to stay a few days with you, so you must look out for a couple of good beds some where near.” (NA, p. 49)

(12) “So many instances within my small circle of friends is remark-able!” (NA, p. 109)

(9)の主語 (Edward) は3人称単数で、現在時制であるにも関わらず、動詞は *has* ではなく、*have* で受けている。また(10)(11)(12)はいずれも主語が複数であるにも関わらず、動詞は *is* あるいは *was* で受けている。(9)と(10)はそれぞれ、*Sense and Sensibility* 中の Anne Steele と召使いの発話であり、(11)と(12)はそれぞれ、*Northanger Abbey* 中の John Thorpe と Catherine の発話である。Anne Steele, 召使い, John Thorpe はいずれも教育程度の低い人々である。Catherine は *Northanger Abbey* の主人公で、次第に知的に成長していく筋立てになっているが、この段階ではまだ友人に言葉を直されたりしており、教養ある人物とはいえない。他の教養ある人々の用いる言葉には、このような文法上の一致の規則を破っている例は見られないことから、Austen が意図的にこれらの人物に誤った用法を使わせていることは明らかである。

次に、Austen 自身の地の文や、教養ある人物の言葉にも見られる数の不一致について見てみよう。

まず、‘there is’型構文における主語と動詞の数の一致について見てみる。一般的に‘there is’型構文では、次に示すように、主語が単数ならば動詞は *is/was*、複数ならば *are/were* である。

(13) there *was* a rapidity of thought which particularly recommended the action to her. (SS, p. 43)

(14) There *are* moments when the extent of it seems doubtful; (SS, p. 21)

Austen でも、この一致の規則がほぼ守られている。しかし、次のような例も見られる。

(15) Within doors there *was* Lady Catherine, books, and a billard table, but gentlemen cannot be always

within doors; (PP, p. 180)

(16) “but there was a delicate fricassee of sweetbread and some asparagus brought in at first. . .” (E, p. 329)

(17) “I’m sure there’s a vast many smart beaux in Exeter;” (SS, p. 123)

(18) “I believe there is two of them.” (E, p. 238)

(15)(16)は主語に複数個の名詞が並置されており、通常ならば複数形動詞が用いられるはずであるが、単数形の動詞が用いられている。これらは最初の名詞が単数形であり、それにひかれて動詞も単数形になったものと考えられる。この用法は古くから見られるものであり、⁽³⁾WDEU (1989, s.v. **there is, there are**)によれば、今日でもこのような場合には単数形、複数形どちらの動詞もありうるという。一方(17)(18)は複数形の主語を *is* で受けている例である。17世紀後半の Dryden の散文を調査した Söderlind (1956, pp. 37-38)によれば、複数形の主語だけが続いたり、複数形の主語が最初に来る場合、文体によって用法に違いがあるという。つまり、注意深い、教養ある言葉では複数呼応が確立しているが、くだけた言葉では複数呼応が好まれるものの単数呼応もしばしば見られるという。(17)は Anne Steel, (18)は Miss Bates といういずれも無教養な女性の発話である。他に複数形の主語を単数で受ける例は見られないことから、Austen が二人の女性の教養の無さを示すために用いている *there is* 構文と言えるであろう。先に見た(16)も同じく Miss Bates の発話である。複数個の主語が並置された *there was* の用法とも考えられるが、Austen が意図的に用いた主語と動詞の不一致であるとも考えられる。

他に ‘*there is*’ 構文で、主語と動詞の数が一致していないものに、次のような例がある。

(19) Of pictures there were abundance. (MP, p. 84)

主語は抽象名詞であるにも関わらず、動詞は *were* となっている。これは、‘*there is*’ 型構文の特殊な例というよりは、Phillipps (1970, p. 158) も述べているように、単数名詞の複数的面、つまり「たくさん」という *abundance* の持つ複数の意味、あるいは先行する *pictures* にひかれたものと考えられる。

‘*there is*’ 型構文以外でも、*and* で結ばれた主語に対し、単数形・複数形両方の動詞が見られる。

(20) Their affection and pleasure in meeting, was just enough to make a very creditable appearance in Mr. Gray’s shop. (SS, p. 221)

(21) The nature and the simplicity of gentlemen and ladies, with their servants and furniture, I think is best observed by meals within doors. (E, p. 355)

(22) “Your happiness and advantage are all that I have in view, and nothing is required of you but to bear with Mr. Crawford’s endeavours to convince you, that they may not be incompatible with his.” (MP, p. 331)

(23) and beauty and wealth were all that excited her respect. (MP, p. 332)

and で結ばれた主語を(20)(21)は単数形動詞で受けており、(22)(23)は複数形動詞で受けている。先述の Söderlind (1956, p. 34)によれば、Dryden においても、二つ以上の動詞が *and* で結ばれているとき、一般には複数形の動詞が続くが、それらが概念的に一つと考えられる場合には、単数形の動詞が続くこともあるという。このような場合、今日でもそうであるが、動詞に単数を用いるか複数を用いるかは、使用者がそれらを一つのものとしてとらえているか、複数のものとしてとらえているかの違いであり、正誤の判断は難しい。

次に、動詞が、主語との間に介在するものの影響を受けたと考えられる主語と動詞の数の不一致について見てみよう。

(24) Nothing but love, flirtation, and officers, have been in her head. (PP, p. 283)

これは地の文であるが、主語が *nothing* であるのに対し、動詞は *have* となっており、主語と動詞の数が一致していない。次の例を見てみよう。

(25) His want of spirits, of openness, and of consistency, were most usually attributed to his want of independence, and his better knowledge of Mrs. Ferras’s disposition and designs. (SS, p. 101)

これも地の文であるが、主語は3人称単数の ‘*his want*’ であるのに対し、それを受ける動詞は *was* ではなく、*were* となっており、主語と動詞が一致していない。(24)(25)はどちらも主語と動詞の間に複数個の名詞が介在しており、Phillipps (1970, p. 158) も指摘するように、動詞が、主語との間に介在する要素（例えば名詞の複数形、あるいは複数個の単数名詞等）にひかれて複数形になってしまったものと考えられる。

最後に、次の例を見てみよう。

- (26) His being such a charming young man, and so rich, and living but three miles from them, *were* the first points of self-gratulation; (PP, p. 99)

意味上の主語を伴った動名詞構文（‘His being such a charming young man, . . . from them’）が主語であり、動詞は3人称単数の *was* となるべきであるが、複数の *were* で受けている。これは主語が概念上複数（魅力的な若者であること、裕福であること、わずか3マイルしか離れていないところに住んでいること）であるところから、*were* が使われたものと思われる。

これまで見てきたように Austen 自身の地の文や教養のある人物の言葉にも時折主語と動詞の数の不一致の例が見られる。しかしこれらは教養の無い人物の用いる数の不一致の例とは違い、不一致を引き起こす何らかの心理的な要因があると考えられる例ばかりで、今日でも散見される類の例である。

2.2 次に、不定代名詞 *everybody/every body, everyone/every one, nobody* の代名詞呼応について見てみよう。今日、一般にこれらの不定代名詞は単数扱いが正用法であるとされる。しかし Austen には、それを受ける代名詞が複数である次のような例が見られる。

- (27) and every body began to find out, that *they* had always distrusted the appearance of his goodness. (PP, p. 294-95)

WDEU (1989, s.v. **everybody, everyone**) によれば、400年以上前から *everybody, everyone* を受けるのに *they, their, them* が用いられており、不定代名詞を受ける代名詞が、単数でなければならないと決めたのは、18世紀の文法家であるという。⁽⁴⁾ また *nobody* に関しても、WDEU (1989, s.v. **nobody, no one**) は、今日複数代名詞で受けるのは極めて一般的であり、OED では1548年にまでさかのぼることができる、十分に確立された用法であるという。⁽⁵⁾ では、18世紀の規範文法家達の影響を当然受けていたと考えられる Austen において、不定代名詞の代名詞呼応はどのような状況であったのだろうか。*everybody/every body, everyone/every one, nobody* の代名詞呼応を調べた結果は次の通りである。

	単数呼応	複数呼応	計
everybody	0	36	36
everyone	0	3	3
nobody	0	11	11

見られる如く、これらの不定代名詞はすべて複数呼応している。主格、所有格、目的格といった格の違いに関係なく、複数呼応が用いられている。*everybody, everyone, nobody* はいずれも文法的には単数であるが、概念的には複数である。Austen では、不定代名詞 *everybody/every body, everyone/every one, nobody* の文法的な単数性よりも、概念的な複数性に一致するよう代名詞が選ばれていると言えよう。Austen は規範文法が盛んな時期にありながら、不定代名詞の代名詞呼応という点では、WDEU の指摘しているような18世紀の文法家の影響を受けていないと言える。以下に、それぞれ2例ずつ例を挙げておく。

- (28) “It was a lovely morning, and at that season of the year a fine morning so often turned off, that it was wisest for *everybody* not to delay *their* exercise;” (MP, p. 401)
- (29) He was a nervous man, easily depressed; fond of *every body* that he was used to, and hating to part with *them*; (E, p. 7)
- (30) she was a great wonderer, as *every one* must be who takes a very lively interest in all the comings and goings of all *their* acquaintance. (SS, p. 70)
- (31) I purposely abstain from dates on this occasion, that *every one* may be at liberty to fix *their* own. . . (MP, p. 470)
- (32) “To be sure, you knew no actual good of me — but *nobody* thinks of that when *they* fall in love.” (PP, p. 380)
- (33) Nobody meant to be unkind, but *nobody* put *themselves* out of *their* way to secure her comfort. (MP, p. 14)

III

以上、Jane Austen の作品に見られる主語と動詞、不定代名詞とそれを受ける代名詞と間の数の一致に関する問題を検討してきた。まとめると次のようになる。

Jane Austen の作品には、主語と動詞の間に時おり数の不一致が見られる。そのなかで、*you was, they was* という表現や、単数形の主語を複数形の動詞で受けたり、複数形の主語を単数形の動詞で受ける明らかな主語と動詞の数の不一致は、Austen が意図的に、話者あるいは手紙の書き手の教育程度の低さを示すために用いたものである。

教養の無い人物だけではなく、Austen 自身の地の文や

教養ある人物の言葉にも主語と動詞の数の不一致が時折見られる。例えば、‘there is’型構文においては、主語が複数個の名詞であるのに動詞は *is/was* である例や、主語の文法的数よりも意味に影響されて、主語と動詞が一致していない場合、等である。

‘there is’型構文以外でも、複数個の名詞が並置された主語の場合には、動詞に単数形・複数形の両方が見られる。これは話者が主語を一つのものとして考えるか、複数のものとして考えるかによるものであり、正しいか、間違っているかの判断は難しい。また、主語は単数名詞一つであるが、動詞との間に介在する要素が複数個の名詞であったり、概念上複数であったりするために、それに影響されて動詞が複数になった例もある。このように、Austen 自身の地の文や教養ある人物に見られる主語と動詞の数の不一致は、それら不一致を引き起こす原因がいくつか考えられ、Austen が意図的に教養の無さを示すために用いている数の不一致とは性質が異なり、今日でも時折見られる用法である。

また、不定代名詞 *everybody/every body*, *everyone/every one*, *nobody* は、主格、所有格、目的格といった格の違い、地の文か会話文かといった文の種類に関係なく、Austen ではすべて複数代名詞で受けている。不定代名詞を複数代名詞で受ける用法は古くからあり、単数代名詞で受けなければならないと決めたのは、18世紀の文法家であるとされている。Austen は規範文法が盛んな時期にありながら、不定代名詞の代名詞呼応に関する限り、18世紀の文法家の影響は受けず、複数代名詞を用いていることがわかる。

注

- (1) 例えば、Phillips (1970, p. 13) は次のように述べている。
 ‘Indeed, quite apart from her very characteristic attention to detail and finish, it was imperative that she should seek to avoid ‘errors’ in the narrative, since in the dialogue she constantly used substandard usage as a means of exposing vulgarity.’
 (2) WDEU (1989), s.v. **everybody**, **everyone** 参照。
 (3) Jespersen (1913, § 6.81) も、動詞が最初の名詞にひかれ単

数形になった例として Austen より約200年も前の次のものを挙げている。

Shakespeare *As You Like it*. 2.127 There comes an old man, and his three sons.

- (4) WDEU に見られる *everyone* の複数呼応の最初の例は McKnight, *Modern English in the Making* (New York: Appleton, 1928) から引用した1576年のものである。

... *every one* prepared themselves – George Pettie, *A Pettie Pallace of Pettie his Pleasure* (1576)

everybody に関しては、OED (s.v. **Everybody**) の挙げる次の例が今のところ 最古のものである。

1530 LD. BERNERS *Arth. Lyt. Bryt.* 285 *Everye bodye* was in *theyr* lodgynges

- (5) OED (s.v. **Nobody**) に挙げられている1548年の例は次のものである。

1548 UDAIL, etc. *Erasm. Par. Luke* 94 b, *No bodye* will receiue you into *their* house.

参考文献

- Clark, John W. 1975. *The Language and Style of Anthony Trollope*. London: André Deutsch.
 Jespersen, Otto. 1913. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part II. Heidelberg: Carl Winter.
 Leonard, Sterling A. 1929. *The Doctrine of Correctness in English Usage, 1700-1800*. (University of Wisconsin Studies in Language and Literature, 25) Madison: University of Wisconsin.
 OED = *The Oxford English Dictionary*, ed. James A. H. Murray, et al. Oxford: Clarendon Press, 1933.
 小野 捷・伊藤弘之. 1993. 『近代英語の発達』(英語学入門講座 第6巻) 東京: 英潮社.
 Phillipps, Kenneth C. 1969a. “Lucy Steele’s English”. *English Studies* 50 (Anglo-American Supplement), lv-lxi.
 ———. 1969b. “Jane Austen’s English”. *Neuphilologische Mitteilungen* 70. 319-38.
 ———. 1970. *Jane Austen’s English*. London; André Deutsch.
 Quirk, Randolph, S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
 Söderlind, Johannes. 1956. *Verb Syntax in John Dryden’s Prose* I. Uppsala: Lundequistska Bokhandeln.
 Uhrström, Wilhelm. 1907. *Studies on the Language of Samuel Richardson*. Uppsala: Almqvist & Wiksell.
 WDEU = *Webster’s Dictionary of English Usage*. Springfield, Mass. Merriam-Webster, 1989.